

平城京羅城門 の再検討

平城京の朱雀大路の南端に立つ羅城門が、都城の中で重要な位置を占めていたことは、養老衛禁律闌入除以限条や養老宮衛令開閉門条などにみるように、法制上からも明らかである。古代日本の都城形制にあっては、延喜式左右京職式京程に示される平安京でのそのように、都城の南面にのみ羅城が設置され、その中央に、唯一の京城門である羅城門が開く。平城京の羅城門については、推定地の大半が現在佐保川の河道となっているが、その西側に隣接する場所で1969・70・72年に行われた発掘調査により、門基壇や朱雀大路、九条大路などに関わる遺構が確認され、羅城門の復原が試みられている（大和郡山市教育委員会『平城京羅城門跡発掘調査報告』（奈良国立文化財研究所編集）1972年）。

発掘調査報告書では、羅城門の基壇は東西32.90m（111尺）、南北17.82m（60尺）で、その上にたつ門は桁行5間、梁間2間の17尺等間、基壇の出は桁行、梁間方向とも13尺の重層入母屋造りの建物であったと考定している。これは1964年に発掘調査で確認された平城宮朱雀門の平面規模とほぼ一致しており、1998年春に完成した朱雀門建物は、全く同じ寸尺で復元されている。

発掘調査で確認された羅城門に直接関わる遺構は、門基壇の掘込地業の西辺と北辺の一部であった。同じ調査で検出した朱雀大路の西側溝および西辺築地塀の位置をもとに、朱雀大路の中心線つまり羅城門の中軸線を求め、そこから基壇掘込地業の西辺までの距離を倍して基壇東西幅を算出したのであり、その方法は妥当であったものの、問題は朱雀大路の規模にあった。1972年以前、平城京の朱雀大路についての発掘調査は、まだ行われたことがなく、報告書では、門推定地の周辺の遺存地割などから、延喜式京程にみる平安京朱雀大路の規模28丈（280尺）と同じであるという前提に立って、朱雀大路の中心線の位置を仮定している。1974年にいたり、朱雀大路の全体規模を明らかにする発掘調査が平城京六条の周辺で行われ、東西側溝中心間距離が73.4ないし74.0mであるという事実関係が報告された。この報告書では、さらに既往の調査成果なども総合して、築地心間距離は平安京朱雀大路よりも広い30丈（300尺）であったとの見解が

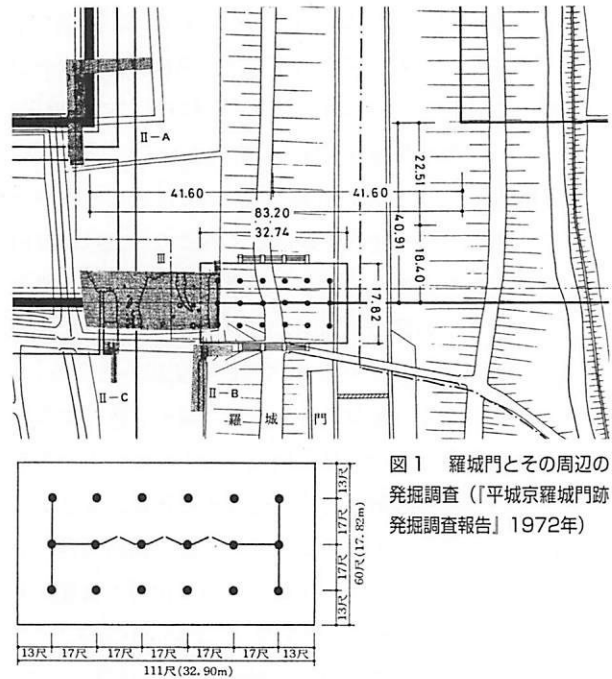


図1 羅城門とその周辺の発掘調査（『平城京羅城門跡発掘調査報告』1972年）

提示されたのである（奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』（奈良国立文化財研究所編集）1974年）。ここにおいて、羅城門規模復元の根拠とされた平安京朱雀大路＝平城京朱雀大路との前提は妥当ではないことが自明となった。

以後、いくつかの地点で朱雀大路に関する発掘調査が実施されているが、朱雀大路の側溝は場所によって4mから8m近くまでと幅に違いがあり、しかも流水による溝肩の浸食が著しい場所が少なくなく、本来の設定規模を復元しがたい場合が多い。当然、道路の中軸線などを推定する場合にも、ある程度の誤差を前提とせざるを得ないことになる。これでは、数尺の単位で議論すべき羅城門の復元規模のデータとしては、こころもとない。そこで、羅城門の周辺で近年条坊道路に関わる発掘調査が行われているので、その成果により、羅城門近くにおける朱雀大路の中心線を確定する方法をとることにする。

ここで採用する調査地点は

① 右京九条一坊四・五坪の坪境小路

（奈良国立文化財研究所『平城京九条大路 県道城廻り線予定地発掘調査概報Ⅰ』1981年）

② 左京九条一坊三・六坪の坪境小路

（奈良市教育委員会「平城京左京九条一坊三坪・六坪の調査 第106次」『昭和61年度 奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』1987年）

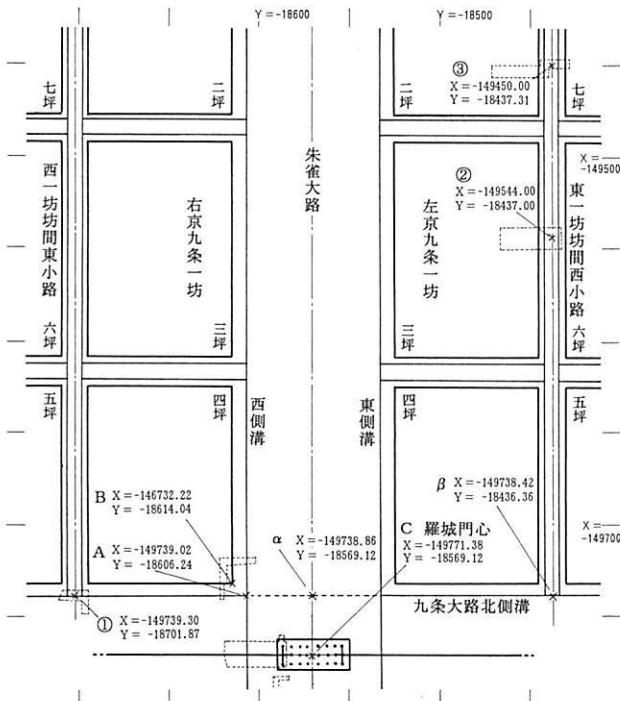


図2 羅城門周辺条坊遺構の調査

③ 左京九条一坊二坪・七坪の坪境小路

(奈良市教育委員会「平城京左京九条一坊二坪・七坪の調査 第167次」『昭和63年度 奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』1989年)

の3カ所である。3地点とも小路幅は側溝心間で7.0ないし7.1mであり、20大尺であった。②、③地点は南北に94m離れており、道路中軸線の方位のフレは $NO^{\circ} 11' 20'' W$ と算出する。この方位角で南にのぼして、九条大路北側溝と交わる点を β としておく。この β 点と①点は条坊計画上の2坪ぶんにあたるが、その実長は265.1mと算出される。平城京の1坪の計画寸法は375大尺(=450小尺)であるので、この場合1大尺=0.3540m(=0.2950m \times 1.2)となり、従来想定されている1尺の実長と合致する。したがって、①～ β 点の中点を九条大路上における朱雀大路の中心点とみなすことができる。これを a 点とする。

この a 点を基準として、朱雀大路の規模を復元すると、西側溝との位置関係から側溝心間74.24mであり、これは210大尺に相当する。築地心間の規模は朱雀大路西辺築地下の掘立柱塀の位置をとると88.44mとなり、250大尺(=300小尺)の計画寸法を復元する。そして、羅城門基壇の東西規模は、掘込地業西辺の位置が朱雀大路西側溝心から16.37m東にあると報告されているので、朱雀大路心 a を基準にすると、41.50mであったことになる。

従来、かつての発掘調査の成果として、羅城門の基壇

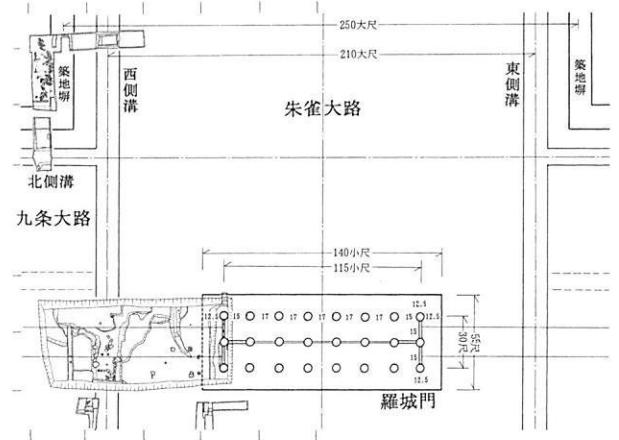


図3 羅城門の復元

東西規模は32.74mとされてきたが、実はそれよりも9mほど大きかったのである。当然のこととして、これまでのように門建物の桁柱間数を5間とみるには柱間寸法が過大になることから、平面規模とその寸法を再考する必要が生じてくる。門基壇の掘込地業東西幅41.50mは1小尺=0.295mで除すると140.7尺、0.296mでは140.2尺となる。掘込地業と実際の基壇規模との関係は、平城宮朱雀門ではほぼ同規模であったことがわかっている。羅城門でも同様の状況であったとして、また建物平面の寸法が完数で設計されていたとすれば、基壇東西幅は140尺とみることができる。基壇南北幅については、基壇調査区のすぐ南に設定したトレンチでは門に関わる遺構は確認されていないので、南北幅18mをこえることはないと思われる。そうすると、従来の所見や朱雀門の復元研究などの成果を援用して考えると、羅城門の桁は中央5間が17尺等間、両脇の各1間が15尺の、総長7間115尺。基壇の出は、したがって12.5尺であったとみておく。梁間寸法については、建物を重層入母屋とみると、15尺2間で、基壇の出12.5尺、基壇南北幅55尺と考定できる。このように、平城京の京城門たる羅城門は、平城宮の朱雀門をしのぐ、平城京随一の大門であったのである¹⁾。

注

1 羅城門に連なる羅城は門の両脇1坪の部分にだけつくられていたとする従来の理解に対して、実はそうではなく、京南辺の全面に、平城宮の大垣にも匹敵する大規模な築地塀が羅城として造営されていたと考えている。平城京羅城門が朱雀門より大規模であったこともあわせて、こうした諸事実の古代都城史上における意義あるいは位置づけについては、別に詳しく論じているので、参照されたい。(井上和人「平城京羅城門再考」『条里制・古代都市研究 第14号』近刊予定)

(井上和人／平城調査部)